

俗信はどう捉えられているか

— 「俗信を信じる」ことのモデル構成に向けて—

伊 藤 哲 司

「占う」

雑誌の巻末にはホロスコープがのっている。

占いの欄は小さな小説だ^{フィクション}と思う。

いくつかのキーワードで自分の未来を描く。

いやなことはあるかもしれないけれど

そんなのめぐりあわせだから

いつかはハッピーになれるはずなのだ。

あたらなくってもいい。

所詮読み捨てのフィクションなのだ、これは。

今、私はハッピーな未来を夢見ることで

満たされる。

あの小さなスペースはその大きさでうることのできる

ささやかな夢のスケールに比例している。

(ある女子大生の日記)

安易な「質問紙調査だけ」の研究批判と「〇〇を信じる」ということ

たとえば「占いを信じる」というのは、どういうことだろうか。毎日のように雑誌やテレビの占いを見て一喜一憂することは、占いを信じるということだろうか。占い師に「今の彼氏とは駄目だね」などと言われてショックを受けることは、占いを信じるということだろうか。占いで悪い結果が出そうだからと占いを避けることも、占いを信じるということだろうか。占いをして一喜一憂をしたりショックを受けたりしても、結果をすぐに忘れてしまうとしたら、占

いは信じないということなのだろうか。

たとえば心理学研究者は、大きな講義室で学生達に質問紙を配布し、「占いをどのくらい信じますか？」という設問に、「かなり・やや・どちらとも・あまり・まったく」といった選択肢のいずれかを選ばせたりする。たとえばそこで「やや」にマルを付けた学生は、何を感じ、何を思って、そこにマルを付けたのだろうか。「かなり」にマルを付けた学生と「やや」にマルを付けた学生との違いは、何なのだろうか。単に信じる程度の量的な違いなのだろうか、それとももっと質的な違いがあるのだろうか。

「〇〇をどのくらい信じますか？」という設問は、何を問うているのかが明瞭であるようで明瞭でない。そこを明確にすることを棚上げにしたところに、「〇〇をどのくらい信じますか？」という設問がある。それに対して疑問を差し挟むことは“タブー”である。なぜなら、それを問いただせば、その質問紙調査自体の妥当性が揺らいでしまうかもしれないからである。

この設問は、被調査者が本当にじっくり考え出したら、答えられないものかもしれない。幸か不幸か被調査者は、研究者が考えるほどナイーブでなかったり真剣に取り組まなかったりするから、それゆえに「〇〇を信じている人は×%」という結果を生み出すことができる。

自省の気持ちを込めつつ言うのだが、「〇〇を信じる」ということを、心理学研究者は概して安直に扱いつぎてきたように思う。「霊」を例に取り上げてみると、同じ「霊を信じる」ということでも、たとえば、霊が実体のあるものとして存在することを「信じる」とことと、観念として私たちの行動を左右することを「信じる」とことの間には、大きな質的相違がある。「〇〇をどのくらい信じますか？」という設問は、その相違を乱暴に押しつぶしてしまっている。

質問紙調査が無意味だというのではない。質問紙調査でしか測れない事柄はいくつもある。しかし質問紙調査は、型にはまった設問しかない場合はとくに、いわば感度の良くない遠隔操作によるアプローチにならざるを得ないことが多い。そこでは、研究者の研究事象に対する実感が伴わないことが多いだろう。

「社会心理学者が一番“社会”を知らない」などと揶揄とも冗談ともとれるようなことが言われることがある。もう少し、見たい現象が生き活きと生じているフィールドにも出て、現象の中で揺られながら考えるスタンスを研究者は持つべきではないだろうか。

本研究のスタンスと本論文の目的

本論文の目的とするところは、占いや超能力などの俗信がどう捉えられているかについての調査データから、「俗信を信じる」ということについて考察し、そのモデル構成に向けての一步を踏み出すことである。

筆者はこれまで、俗信（＝非科学）について様々なアプローチを試みてきた（たとえば、伊藤、1995；伊藤ら、1996）。俗信は、「科学的な検証を経ていないにも関わらず、ア・プリオリに信じられている知識・技術・因果観」（野村、1989）と定義できるが、科学が高度に発達した現在も、定義上科学とは相容れない俗信が広く受け入れられているという事実が、この一連の研究の出発点にある。筆者がとったアプローチは必ずしもシステマティックに設定されたものではないが、俗信という対象にいろいろな角度から迫ってみたいと考えた上での実践である。

筆者が行ってきたアプローチには、上で批判したような質問紙調査も含まれているが、それだけではもちろんない。筆者自らも占いや屋での占いを経験したり、占いや屋へ行って占いや経験をしてもらった学生に詳細な面接をしたり、タロット占いやを実験室で行って被験者の反応を調べたり、小学生対象の質問紙調査で俗信が身についていく過程を探ったり、あるいは一般雑誌の俗信関連の記事がどのように変遷してきているかを調べたりした（伊藤、1995；伊藤ら、1996）。それらのアプローチをさらに深め、結果を統合的に考察していくことが、筆者にとってこれからの大きな研究課題と考えているが、実験からフィールド調査まで様々な方法を取りうる社会心理学の特徴を活かすことを考えて研究を進めてきた。それに伴って、いくつかの具体的な課題が明らかにもなった。

そのひとつへの取り組みが、本論文の目的とするところである。「〇〇を信じる」と言うのは容易だが、それがどういうことを指しているのかを示すのは、必ずしも容易ではない。そこでできるだけ詳しく、「〇〇を信じる」という事象について、人々の考えを探ってみたい。なお同様の調査は、先にもすでに一部報告しているが（伊藤ら、1996）、それらは主に女子学生を対象にしたものであった。一昨年（1995年）、オウム真理教が引き起こしたとされる様々な事件に人々の注目が集まったときに、そのようなカルト宗教になぜ理系の学生が入信したのかということが新聞などで様々に論じられた。それと関連するが、男子学生、中でもいわゆる理系の学生が俗信をどう捉えているのかは、注目すべき点のひとつである。そこで今回は、その点についても調べてみることにし

た。

以下に紹介する調査は、調査Ⅰと調査Ⅱの2つから成っている。

調査Ⅰは、様々な俗信がどう捉えられているかについての面接調査である。そこには、単に「信じる」「信じない」という言葉では片づけられない内容が含まれているはずである。また、男子学生と女子学生の比較（それは後に述べるように擬似的だが理系学生と文系学生の比較に相当する）をする。そこから、個人差を越えてどのようなポイントが見いだせるかについて考える。

調査Ⅱは、占いと超能力という2つの俗信に絞り、より多くの学生にそれらのついでにの考えを自由記述させた調査である。質問紙による調査であるが、自由に記述させることによって、やはり単に「信じる」「信じない」というのではなく、質的な内容を検討することを意図した。また調査Ⅰのような面接調査では、どうしても調査人数が少なくなってしまうのだが、このような方法ならば多くの人を対象にできる。ここでも文系学生と理系学生の比較をし、それぞれ俗信をどう捉えているかのマップがどのように描けるかを検討する。

調査Ⅰ 様々な俗信がどう捉えられているかの探索一

調査Ⅰでは、様々な俗信がどう捉えられているかについて、面接調査によって探索する。男子学生と女子学生の発想の違いを比較したいと考えたために、一方は理系学部の男子学生に、もう一方は専門学校の女子学生に協力を願った。その専門学校は歯科衛生士を養成するための学校であり、カリキュラムにいわゆる理系的な要素を含んでいるため、文系学生とは言い難いところがあるが、いわゆる理系の学問を専門的に学ぼうという考えは強くなく、むしろ文系の学生に近い。よってここでの比較は、擬似的だが理系学生と文系学生の比較でもあると考える。

〈方法〉

被調査者 被調査者は、茨城大学理学部・工学部1年生の男子学生12人（18～20歳）と茨城歯科専門学校2年生の女子学生9人（19～20歳）である。両者とも筆者が担当する心理学の講義を受講しており、講義内で調査協力を呼びかけ、それに応じてくれた学生たちである。したがって筆者とは、あらかじめある程度の面識があった。

なお茨城大学理学部・工学部の学生は、約150人の受講生の中から名乗り

出てくれた人たちであり、その中には数人の女子学生も含まれていたが、今回の報告からは除外した。また茨城歯科専門学校の学生は、約50人の受講生から立候補してくれた人たちであり、占い屋での占いを経験してから面接をするという条件で協力を依頼をした。

被験者はアルファベットと通し番号でM1（男子学生の1人目）F2（女子学生の2人目）などと略記することにする。

手続き 上述の方法で研究協力を願った学生に、茨城大学人文学部の筆者の研究室まで足を運んでもらい、そこで面接を行った。茨城大学の男子学生にはその面接の時だけ出向いてもらったが、歯科専門学校の学生には、まず一度来室してもらい、占い屋で占いをするという経験をしてくることに依頼などをし、占い経験後に日を改めて再来室してもらった。

面接は1人ずつ行った。（女子学生の場合、2人で来室することが多かったが、その場合も面接は1人ずつとした。）そこで「占い」「血液型性格判断」「霊」「こっくりさん」「超能力」「予言」「運命」「生まれ変わり」「宗教」のそれぞれについて、自分自身の考えを自由に話してもらい、内容に応じて筆者が柔軟に質問をした。また、「(占いや超能力などに) 傾倒しすぎる人」と「(占いや超能力などを) 否定しきる人」をどう思っているかについても意見を求めた。

なお1人あたりの面接時間は約1時間であった。

〈結果と考察〉

得られた結果はかなりの分量に上るので、被調査者が話してくれた内容を要約し、一覧表にしてまとめた（表1・表2）。男子学生については、学部と専攻名も記した。各被調査者のそれぞれの内容を吟味し、その事象を肯定的に捉えているか否定的に捉えているか、あるいはそのどちらとも言えない捉え方をしているかを判断して、表中に網掛けでその区別を示した。

俗信の項目別に見た捉え方の違い

まず「占い」についてであるが、ここの結果を見る限り、占いは女性のものであるという一般的にあるイメージは感じない。たとえば男子学生でも、「占いは気にするし参考にする。人の力ではない何か働いている」(M1)、「文明化されていない民族などなら、信憑性のある占いがあるのかも」(M2)といっ

表1 様々な俗信に対する考え (理系学部の男子学生)

被調査者	占い	血液型性格判断	霊	こっくりさん	超能力
M1 19歳 理学部 地球生命	占いは気にするし参考にする。人の力ではない何かがある。占いの占いの経験あり	当たっているところもある。小学生のときに知った。相手の血液型が外れると嬉しい。	今は何とも思わないが中学生の頃は信じた。弟が自転車の後ろに何かに乗られたらしいが	やったことも見たこともない。手が上がるのばやしたが、単なる思い込みだろう。	テレビのは騙だろうが霊が死んだときの予感はあると思う。人間に変わった領域だろう
M2 18歳 理学部 地球生命	生まれ方によって性格が違うのみ。占いは相手の手を知っているほど来た。	物理的・生物的には関係ない。言われているように合わせてしまうことはある。	存在するとしても、物質ではなく幻覚。人間の頭の中にある。	本で知っているだけ。人が動かしている以上のものではない。	あるものもないものもある。未知でテレビには考えられない。科学の範囲のもの。
M3 20歳 理学部 生物	文明化されていない原始などなら、霊感がある占いがあっても具体的なイメージはない	関連は絶対ない。4パターンしかないほど性格は単純ではない。性格は生まれた後に形成	存在すると思う。人は死んだら目に見えない形のない精神が別な次元には関係ない。	今でも不思議に思う。つくみさんではない。何かの力があった。コックリさんと話さない	進化の過程の中で残ったものか。霊は人間の能力。科学では解明できないこと。
M4 18歳 理学部 数学	興味はない。占いの根拠はなさそうだが、あるのかも。それについての知識がない。	関係ないと思ってる。完全にそうとは言いがけない。残りの1割には何かあるのかも	基本的に信じていない。目に見えないエネルギーだと言われると、完全に否定はできない。	痛で見ていたことはあると思うが、どのようなものか全く分からない。子どもの遊び。	あると否えない。科学的に証明されていないことだから信じているかも。人体で試してみたい。
M5 20歳 工学部 都市計画	過去の統計データを見てやっているので、当たるものもある。タロット占いは当たらない	基本的な性格はこれで決まる。でも自分でも変えられるもの。パーソナリティに影響する。	霊がいるとしたら、目に見えない存在なのでは。霊感だろうとも思うのだが。	どういふものかも知らない。怖くてインチキな感じがする。自分には関係ない。	人間も持っている能力。発達できる人。無理でできない人もいる。科学で試されるものも
M6 18歳 工学部 都市計画	雑誌などでチラシと見るくらい。いいことだけ受け取る。あまり関心はない。	関係がない。言われればそうかとも思うけど真には受け取れない。当たっていると思うだけ。	霊の存在はまったく信じていない。小学生の頃までは信じていたが	中学生の頃みなやっていた。すごいと思ったが、偶然であって信じていない。	ある程度あるのかも。サッカーのアイコンタクトとか。透視も直感的。科学では解明不可
M7 20歳 工学部 物質工学	おみくじを引いても、その場限りのこと。根拠がないから、否定的に考える。	関連はないと思う。家族全員O型だが、性格は違う。何のデータがあるのだろうか。	いたら面白いが、いないと思う。根拠がない怖いと思うことがあるが証明できないこと。	今では笑って何とも思わない。動くのは事実であり、小学生のときにはかなり信じた。	テレビのそれは信じられない。スポーツのトッププレーなどの優れた能力はあるが
M8 18歳 工学部 物質工学	根拠がないと思うし、それで睡られたりもする。高校2年までは、あれこれ気にしていた	まったく関係ないと思う。性格にはいろいろな側面がある。4つにすぎずる。あれこれ気にしていた	霊は、人間の中にいて空間にはいないのでは。霊野物語の妖怪は不思議なもの。	自然と力が入って動くのを、霊のせいに行けるシステム。備かな手の方で動いている。	テレビのは全部うそ。今の時点では認めがたいし、科学的に証明されることもないだろう
M9 19歳 工学部 物質工学	家相などはちょっと信じる。自分の家はそれによって作られている風水も統計学的なもの	自分はA型で、何となくそれなりに当てはまっている。なぜそうなのかは証明できない。	いないとも言えず、そういうのがいてもおかしくない。科学はこの話に遡っていない	やっている人は自分が入り込めなかった。あえてやろうとは思わない。科学で証明不可能	本当にあるのだろうか。マジックをやるので、嘘に見えるの多いが。科学は遡っていない
M10 18歳 工学部 機械工学	何かしらの霊感はあるのだろうか。確率であったり経験則であったり。本物もあるかも。	あまり関係はない。A型と言われるがO型。家族がA型だから、性格は数値化できない	いそうな気がする。特定の場所にいるのかも生霊もあるのかも。あまり信じられないが	やったことないが、悪意心理の働きか、何しているのは信じる気がしない。	あってもおかしくないが。科学で分かってなくてもいい。麻痺も中途半端に力があったのか
M11 18歳 工学部 IT通信	自分についていることがあれ信じているが、信憑性はないと思う。生命線が短く気になるが。	科学的には証明できていないが、自分はB型で合っている気がする。メカニズム分らない	いると信じたり、いないと信じたり。科学的にプラスマだと聞けばそうかなとも思う。	小学生のときに友人がやっていたが、何も起こらなかった。今考えて何でもないと思う	ないと思う。物を動かすには物理的な力が必要だから。透視などは詐欺だと、思う。
M12 20歳 工学部 情報工学	科学的じゃない何かがある。相が見える人がいるのかも。早占いは天文学か。	一切関係ないと思う。同じ型の人でも、みな性格は違う。話題に上れば合わせるが。	結構嬉しい。多分何かある気がする。心靈写真を見ると、真にかかると、トリックもあるが	やっているのを見たことがあるが、やったことではない。やればイヤな目に遭いそう。	半信半疑。目前でやられたら信じる。テレビは一番でそれだけ人体浄化もあるかも。

註) 濃い網掛けは「肯定的」、薄い網掛けは「どちらとも」、網掛けなしは「否定的」を表す。

予言	運命	生まれ変わり	宗教	傾倒しすぎる人	否定しすぎる人
後からの解釈が多い。ノストラダムスの、まわりがそういうふう動いてしまっている	そういうのではない。以前に見たものがある感じがするの。運命につながっているのかも	生まれ変わりは信じない。死後の世界もない	高校生のときに宗教の合宿に行ったことある。すべてではないが、正しいところもある。	ちょっと嫌だと思う。女性ならまだいいけど男性ならばちょっと怖いと思う。	その考えは別にいいが、私も信じていない
ノストラダムスは外れる確率の方が大。簡単な確率であり、1999年にとくに何かはない。	運命があるとは信じない。性格によってこういう場面には違いやがうということがある	信じていない。自分がよくなるのが欲しいから、信じる人もいろいろいる	一神教も多神教も問題がある。新宗教は怖い。宗教には関わりたくないと思う。	外れたときにはどうするのだろうと思う。助言と変わらなく聞かないが。	否定しすぎるのもどうか。大槻教授の考えは頭が固い。ひとつの理論を盲目的に信じてる
占いの一種で、ありうること。ノストラダムスの予言については、あまり信じていない。	あると思うが、後で変えられるもの。人生にはいくつも選択肢があり、自分で選べる。	あると思う。前世が輪廻のようになっている。前世が輪廻して、生まれ変わる人間になる。	権力とくっついたりして、書かせるものになっている。ちょっとしたものに神が宿る。	ちょっと可哀想。自分の人生はどう考えているのだろうと思う。幸せは作っていくもの。	現代の科学知識をだけをよりどころにする学者もいるが、理屈だけで通らないことがある
予言はあってもらえない。大槻教授は、何が見えることが出来るのかも	ある程度あると思う。ものによって違うかもしれない。何が見えるか、それによって違う	死後の世界はないだろうがあるのかも。時間的輪を自由に行き来できることもあるのかも	居場所を求めて入信する人はいるのだから自分はあまり好きになれない。	別にいいのではないかな。予言までめいめいやるなら、予言のうたもなげたい。	そういう予言が入らない。それはそれでいい。信じていない。そういう人も信じている
詳しくは無理だが、大まかには可能なものではノストラダムスはあまり信じてない。	大まかに可能なものではあると思う	ないと思う。死後の世界もないと思う。人間死んだら何もなくなくなる	オウムのごとで、その危険性を認識した。オウムが正しいところもあるが関わりたくない	ちょっと馬鹿だなと思う。運命は変えようがないのだから。思うがままがいい。	大槻教授の意見は極端過ぎで、頭が固い。科学でなくても一部分認められるものはある。
ノストラダムスのことなど信じない。小学生のときに本当なら怖いと思ったが。	未来は決まっていなくて、自分にとっては大して重要ではないこと。	宗教の中の教えとしてある話。実際にあるとかなんとかの次元のことではない。	今は本来ある宗教ではなくなってきている。オウムのことで、だいぶ悪い印象を受けた。	仕方がないと思うけどやっぱり悪かだと思う。止めておけばいいのに。	大槻教授などは頭が固いと思う。科学で説明されないこともある
予想は信じるが、予言は信じない。小学生のときノストラダムスの本を友達と読んだが。	出来事があるたびに変わるもので、決めつけられないもの。人生にはいくつも選択肢がある	精神世界は信じないが言い切れない体験がある。川崎大師の砂を持ち帰る夢を見た	今の宗教はお金儲けで神秘的と思わない。キリスト教や仏教なども異様に見える。	損はしていないだろうが、行動が制限されたりする。可能性がつぶされることもある。	自分の考えも否定的だが、大槻教授の考えほどまでいくと、あそこまではと思う。
ほとんど信じない文章が曖昧で、どうでもとれる。	運命があるとは、個人としては思わない。	死ねば魂は徐々に消えていく。生まれ変わりはないと思う。	人の心を教うもの。営利目的なのは、宗教と呼べない。オウムで、その怖さが分かった。	その人はその人。こちらに押しつけるのはやめてほしい。何かの本に影響されているのか	大槻教授は科学を信仰している。自分もそう思う。本が本気で読まないと
ノストラダムスは、小学生のとき怖かったがあまり考えない。ピクピクとも仕方ない。	何となくあるように思う。出会いなどが決められているとは思わないが、後で思うものか	輪廻があると思う。生まれ変わりはある。前世が輪廻して、生まれ変わる人間になる。	信じることで正当化してしまうことがある。新しい宗教はお金が見え見え嫌だ。	ストレスがなくなるならいいけど、全面的に順ってしまうなら問題もあるかも。	大槻教授は何様のつもりだろうと思う。もう少し頭を柔らかくしてほしいと思う。
ノストラダムスはいろいろ解釈できるから、あまり信じられない。でも完全否定は難しい	あるかもしれない。ないかもしれない。どこでこうしなかったらとかは思うが。	あっていい。自分が生まれ変わったときおじさんが死んでいる。あまり信用していないが。	人それぞれで、これが正しいということはない。金儲け的なものもある。オウムは宗教ではない	参考にする程度ならいいが、自分の考えをまったく使わないのは、あまりよくはない。	今の科学は完成していないのだから、すべて説明するのは無理。大槻教授は一方的すぎ。
あまり信じられないがノストラダムスについても、実例を見ると、本当かと思うことも。	運命などというものはないと思う。未来は決まっていけない。	生まれ変わりは信じていない。死は「おしまい」	宗教をあまり信じてくはない。オウムによって宗教に対する警戒心が強くなった。	自分では決められなくて、男性でも女性でも、同じように思う。	大槻教授の考えは固くて賛同できない。今の物理学では知られていない力もあるかも。
胡散臭くて信じられない。ノストラダムスは無理な解釈だろう。でも否定しきってない。	あまり信じていない。人生が決められているというの嫌だし、自分で切り開いていく。	話を聞けばあるのかもと思う。死んだら意識をもって天国地獄へ行くだのか。前世来世も。	宗教を振り所にするのは構わない。信じた人が信じればいい。ただ信じ込むのは怖い。	否定はしないし、言っても無駄だろうが、いい気はしない。自分が信じられないの可哀想	大槻教授の考えは固くて賛同できない。今の物理学では知られていない力もあるかも。

註) 濃い網掛けは「肯定的」、薄い網掛けは「どちらとも」、網掛けなしは「否定的」を表す。

予言	運命	生まれ変わり	宗教	傾倒しすぎる人	否定しきる人
ノストラダムスは地震の予言が外れたから信じない。1999年のことは気にしていない。	決まっていない。大陸はあっても、その中で変えられるもの。自分次第で変えられる。	死後の世界はある気がする。生まれ変わりはある人とない人がいるか——いや絶対ない。	信じている人は信じていないと思う。批判されるのは嫌。無しいという感じがする。	精神的に弱いなと思う。とくに男だと、おこまっぽい感じがしてかなり嫌だ。	男であれば当たり前と思う。女だったら諦めているなど。ちよっとは信じてもいいのでは
小学校の時にノストラダムスの話を聞いて、ショックで泣いた。今では気にしていない。	運命とは何だろう？「これが運命」などと言ったりするが。安っぽい言葉になっている。	死後の世界があるといいなとは思うが。あまり信じない。死んでからも生きているのか。	オウム以前から宗教には悪いイメージがある。キリスト教は習慣であり、生活の一部。	古いために雑誌を買う人は馬鹿みたい。男ならとくにおかしい怖いなと思う。	とくに意見はなし。
	運命はなくて、偶然だろう。未来は決まっていないのでは。	あまり考えた音がないが。死んだら霊のなるのか？あまり関係ないような気がする。	怖い馬鹿馬鹿しい。宗教をやっている人は、自分の人生を預けてしまっている。	あまり傾つてばかりではと思うし、もっと自分で考えたらと思う。参考程度に。	
ノストラダムスは信じていないし、氣にかけていない。予言の力はある人にはあるかも。	予言は信じている。自分には関係ない。予言の力があるかはいらない。	どうなのだろう。今の実習が面白いから、来世は楽にいきたい。また女がいい。	オウムは怖いイメージがある。宗教とはそういうところか。キリスト教などはいい。	古いは助言だけ。傾りすぎてはいけないし、信じ切っても駄目。女性なら多少はいいけど	自分の信じていることを否定されると、かえって実際にいるのかもと思う。
			宗教にとらわれないで信仰するのがいい。団体に入ってお布施がどうかはよくない。	人間的に弱いと思う。自分の意見を持っていない感じ。男性でも女性でも嫌だ。	そういう意見の人がいてもいいけど。千人十色でもみな考えが違っていいはず。
外れることが多いからあまり信じない。1999年の話は来ないような気がする。	運命は決まっていないと思う。明日のことは次の日にしか分からない。未来は自分で。		以前から宗教にはあまりいいイメージがなかった。仏教やキリスト教はそうでもないが。	いいイメージは持たない。それが男なら抵抗を感じるし、気持ち悪い。女なら少し分かって	
あまり信じないが、ノストラダムスの予言は怖い。全部が全部本当な訳ではないだろうが	予言は信じている。自分には関係ない。予言の力があるかはいらない。	あるとも思うし、ないとも思う。半信半疑。前世は懐となくある気がする。	もともと悪いイメージがなかったし、怖いイメージだった。あまり聞わりたくない。	そこまではなりたくない。自分の意志でちゃんと決めてと思う。特に男なら受け付けない	少しは信じたらと思うし、全部が全部否定できるわけではない。分かってもらいたい。
嘘っぱちだと思う。ノストラダムスを弟が氣にしているが、自分は信じない。	運命はあるのだろうか人と出会うのも運命。後から考えたことかもしれないが。	何も考えていない。死んでみないと分からない。前世古いをやったことがある。	何も信じていなくても今まで生きてきて、オウムは、こんな怖い宗教があったのかいいう感じ	よくは思わない。自分で考えていい。それが男なら、嫌だし傾りないと思う。	
あまり信用できない。ノストラダムスは、そのころ地球温暖化でということなのでは。	予言は信じている。自分には関係ない。予言の力があるかはいらない。	自分が何かの生まれ変わりだとは思わない。死後の世界はないのかなあ。	あまりこだわっていないから分からないし、関心もない。勧誘の人にはいいイメージない	よくないと思う。自分で決めるから責任がある。女の人はまだ可愛げがあるのだが。	

た意見を述べる被調査者がおり、占いをかなり信憑性のあるものとして受け入れている場合がある。また、中国の風水を「統計学的なもの」(M9)として捉えていたりする被調査者がいるように、「科学」の一部として捉えているらしい男子学生もいる。ただし、男子学生12人中4人が占いを否定的に捉えていることは、女子学生の9人中1人に比べると多い。女子学生の場合は、占いを否定的に捉えることは非常に少なく、「本当に力のある占い師は、公の場には出てこない」(F5)とか、「占いには何かある」(F3)とかいった意見が聞かれ、男子学生と比べると、より直感的な発想でその信憑性を捉えているように見える。「根拠は知らないが、見ないと安心できないし落ち着かない」(F7)としている女子学生がいるし、そもそも「根拠は考えたことがない」(F9)ということも多い。また、「断定調の(言い方の)方がそうなのかと信じる」(F3)といったことも聞かれた。

「血液型性格判断説」についても、「占い」と同様に、男子学生の場合は、肯定論と否定論に大きく分かれているが、女子学生の場合は、否定論をとっている人は1人もいない。女子学生の肯定論者は、「何となく関連ある」(F1)、「自分のまわりの人が当てはまっている」(F3)、「たまに当たっている感じの人もいる」(F9)といった具合で、「占い」の場合と同様に、明確な根拠を示している人はいない。もっともこの項目については男子学生の肯定論者も、「当たっているところもある」(M1)、「基本的な性格はそれで決まる」(M5)などと述べるに留まり、「占い」とは違って、なぜそうなのかという点は不問にする傾向がある。

「霊」や「こっくりさん」については、女子学生の方がやや肯定的に捉えており、女子学生で否定的に捉える人は少ない。「霊」については、女子学生の9人中5人がその存在を肯定し、中には「自分で見たことがある」(F5)という人もいる。「こっくりさん」については、9人中7人までもが肯定でもなく否定でもない。「今は信じていないが、何となく怖いし、やりたくない」(F1)というのが、どうやら女子学生の大方の意見のようである。「こっくりさんではなくキューピット様が流行った」(F3)と言う人がいるように、こっくりさんの類似物(実はやり方は基本的には同じ)で、こっくりさんの恐怖を避ける傾向も認められる。男子学生の場合は、「こっくりさん」を「カラクリがあるとは思えない」(M3)とする人もいるが、12人中9人が否定的な見解を示している。それでも「霊」のことになれば、否定をするのは12人中3人だけで、

「目に見えないエネルギーだと言われると、完全に否定はできない」(M4)といった意見の人が多い。

「超能力」の場合は、肯定論・否定論の割合は、男女の間で大差はない。男女とも、肯定する人もいれば、否定をする人もいる。ただし、肯定論の内容がかなり異っており、男子学生の場合は、「進化の過程の中で使わなくなったのでは」(M3)、「DNA配列の解明されていないところから何かあるかも」(M4)というように、理屈をつけて肯定する人がいるのに対して、女子学生の場合は、「(超能力は)あると思う。テレビの(超能力)は裏があると分かっている、スゴイと思ってしまう」(F1)というように、なぜそれを信用するのかについての理由は明確には述べないことが多い。常識では到底考えにくい人体浮遊も、2人の男子学生(M4とM12)と1人の女子学生(F5)がありうると答えているのは、注目すべきことだろう。「(オウム真理教の)麻原(彰晃)も中途半端に力があったのか」(M10)と言う男子学生もいる。

「予言」は、ここでは主に1999年に人類が滅亡するというノストラダムスの予言について尋ねるつもりで、「超能力」とは別項目として設定した。ノストラダムスの予言については、小学生や中学生の頃にそれを知ったという人がほとんどで、「小学校の時にノストラダムスの話を聞いて、ショックで泣いた」(F2)というほどの人もいる。(表には示していないが)多くの人が、1999年に自分が何歳になっているか年齢を計算したという経験を持っている。その1999年の予言を信じているという人はさすがに少ないが、中には「ノストラダムスの予言は、もし本当なら怖いと思う」(F5)「ノストラダムスは無理な解釈だろう。でも否定しきっていない」(M12)という人もいる。ノストラダムスの予言には否定的でも予言一般については肯定的に捉える人も、何人かいる。男女差は明確には見いだせないが、「4次元以上の世界があり、何か見ることができるのかも」(M4)と述べているのは、理系の男子学生として特徴的な言方のように思える。ちなみにこの意見を述べた学生の専攻は数学である。

「運命」および「生まれ変わり」は、いずれも個人がどういう道筋をたどって生まれ死ぬのかということについての質問である。「運命」については、決まっていないとする意見が男女とも見られるが、女子学生の方が明確に肯定する人が多い。ただし、それを悲観的に捉えているのではなくて、「未来は決まっていると思うが、先を切り開いていくのは自分」(F5)というように、積極的に捉えているのが特徴である。男子学生の肯定論はもう少しニュアンスが違っ

ており、「色のビーズは混ぜ合わせても色の固まりができるが、それに（運命は）似ている」（M4）というように、やや理屈っぽい言い方の意見が見られる。「生まれ変わり」については、女子学生の大半が否定しきれないという意見である。男子学生の場合は賛否両論という感じで、「記憶が断片のようになって、それが再構成され、生まれる人間に宿る」（M3）といった意見から、「生まれ変わりは信じていない。死は“おしまい”」（M11）といった意見まである。

「宗教」については、自分自身が何かの教団の信者であるという人はいなかった。ここに得られた結果は、宗教を自分が信じているか否かではなくて、宗教というものをどう捉えているかという点についてである。宗教を比較的肯定的に捉えているのは、高校の時にある教団の合宿に父親の勧めで参加したことがあるというM1で、「すべてではないが、正しいところもある」と述べている。他の人は、「宗教を拠り所にするのは構わない。信じたい人が信じればいい。ただ信じ込むのは怖い」（M12）というように、自分以外の人間が宗教に関わることには寛容な人もいるが、大半は、オウム真理教の事件の影響のためもあって、「今は本来ある宗教ではなくなってきた」（M6）といった具合で、男女ともかなり否定的なイメージが蔓延している。

「傾倒しすぎる人」「否定しきる人」に対する意見

大方の被調査者が、程度の差はあれ何らかの俗信に傾倒しているが、自分よりもずっと大きく傾倒する人、あるいは逆にまったく傾倒しない人に対してはどのような意見を持っているだろうか。

「傾倒しすぎる人」の項目については、質問するときに「占いなどで人生の一大事を決めてしまうような人などについてどう思うか」という尋ね方をした。特徴的なのは、むしろ女子学生の方で否定論ばかりだということであり、「占いのために雑誌を買う人は馬鹿みたい」（F2）、「人間的に弱いと思う」（F5）などの辛辣な意見が聞かれる。また男性がそうであることについてはとりわけ否定的な意見を持つ人がおり、「とくに男だと、おかまっぽい感じがして、かなり嫌だ」（F1）といった声が聞かれる。それに対して男子学生はむしろ概して寛容で、「その人はその人」（M8）というような意見であったり、「ちょっと可哀想」（M3）というように同情的な気持ちを抱いたりもしている。

「否定しきる人」という項目については、「超能力の存在を否定しきる人についてどう思うか。たとえば（テレビや本などで超能力批判をしている物理学

者の)大槻教授のような考えはどうか」と尋ねた。今度は逆に男子学生が、それを否定的に考える傾向があり、「大槻教授の考えは頭が固い」(M2)、「大槻教授は何様のつもりだろう」(M9)などの厳しい言葉での批判が見られた。中には「普通だし、まっとうだと思う」(M10)というように、大槻教授を支持する人もいるが、そのような意見は少数である。むしろ女子学生の方が、「そういう人はそれでいい」(F6)というように、積極的な支持ではないが、許容する態度を示している。ただし女子学生の中にも、「全部が全部否定できるわけではない。分かってもらいたい」(F7)というように、自分の考えを否定されることの拒否ととれる意見も見られる。

個人差と個人の特徴について

どの俗信を信用するかについては個人差が大きく、筆者がすでに前報(伊藤ら, 1996)で指摘したように、すべての俗信を盲目的に受け入れるのではなく、自分の考えで取捨選択をするという「選択的」という特徴が、ここでも指摘できる。しかも、どの項目を信用できるものとして選択しているかの規則性は、結果を概観する限りにおいては見いだしにくい。しかし、女子学生では、俗信をほぼ全面的に否定的に捉えるという人がおらず、いずれかの俗信を信用できるものとして捉えている人が大半であるのに対して、男子学生では、俗信全般にわたって肯定的である人(M3・M4など)と否定的である人(M6・M7・M8など)に分かれている。つまり、俗信を総じてどう捉えているかということ考えたときに、個人差が大きいのは、どうやら女子学生よりも男子学生であるらしいということである。

俗信に傾倒する若者の特徴を、筆者は前掲の報告(伊藤ら, 1996)で「選択的」(信用できる俗信を取捨選択していること)「非絶対的」(その根拠を問うことがなく、強い信念ではないということ)「流動的」(他の人の意見に影響を受けやすいということ)であると述べた。また後に、「独創的」(単なる受け売りではなく、その人なりの工夫が凝らされた信念になっている)という点も指摘した(伊藤, 1996)。以上の「選択的」「非絶対的」「流動的」「独創的」を俗信に傾倒する若者の特徴と考えるのは、今回の結果からも概ね妥当であると思える。ただし、とくに男子学生の場合に、俗信が信用できるものであることを理屈で説明する傾向も認められた。とくに「超能力」を肯定的に捉える男子学生は、前にも述べたが、進化の過程が云々といった点に言及する。これは女子

学生には見だしにくいことであり、4つの「〇〇的」のうち、少なくとも「非絶対的」という点は見直されるべきかもしれない。それに伴って、「流動的」というのも、必ずしも当たらないものになっていく可能性がある。

調査Ⅰの結果の要点

結果の記述がかなり冗長になったので、調査Ⅱについて述べる前に、これまでの結果のうち、とくに男女差に関連して重要であると思われるポイントを簡潔にまとめておきたい。

- ①男子学生の方が理屈っぽく因果的に捉えている傾向があり、それに対して女子学生は直感的に捉えている傾向がある。
- ②女子学生よりも男子学生の方が、俗信をたくさん受け入れる人とそうでない人の差が顕著である。
- ③「傾倒しすぎる人」に対する批判は、女子学生の方が強く、「否定しきる人」に対する批判は、男子学生の方が強い。

筆者にとって意外であったことは、理系学部男子学生が、とくに「超能力」に対して様々な理屈を持っているということと、先述の大槻教授批判が極めて強いということである。また「占い」に対しても、取るに足らないものとして片づけてしまわないことが男子学生にも多く、むしろかなり肯定的にそれを捉える人がいることが印象的である。

調査Ⅱ 一占い・超能力はどう捉えられているかのマップ作り一

調査Ⅰは、様々な俗信がどう捉えられているかについての示唆に富むものであったが、やはりもう少し多くの学生の意見を集めて考察してみる必要もありそうである。そこで調査Ⅱでは、同じ俗信でもかなり内容と趣の異なる占いと超能力の2項目に絞って、自由記述形式の質問紙調査で多くの意見を集め、それらをまとめる。それによって、若者が占い・超能力をどう捉えているかのマップ（見取り図）を描いてみたい。

〈方法〉

被調査者 被調査者は、茨城大学理学部・工学部・農学部1年生の学生130人

(男子111人、女子19人：18～20歳)、茨城歯科専門学校2年生の女子学生48人(19～21歳)およびシオン短期大学の女子学生92人(18～20歳)である。茨城大学の学生と歯科専門学校の学生は筆者の担当する心理学の講義を受講しており、調査Iの被調査者もそこに含まれている。シオン短期大学の女子学生は、筆者の担当ではないがやはり心理学の講義を受講している学生である。

茨城大学の学生は、女子学生も1割強含まれているが、全員が理系学部 of 学生である。シオン短期大学の女子学生は、いわゆる文系学部の学生であり、茨城歯科専門学校の学生は、先述の通り厳密には文系の学生とは言い難いが、理系よりは文系に近いと判断した。よって、結果のまとめの際には、茨城大学の学生をひとまとまり、茨城歯科専門学校とシオン短期大学の学生でひとまとまりとして比較することにする。便宜上前者を文系学生、後者を理系学生と呼ぶ。

手続き 調査はすべて講義中に行った。回答用紙を配布し、占いと超能力について、20～30分ほどかけて、自分の考えを自由に詳しく書いてもらった。なお、講義の都合上、シオン短期大学での調査だけは無記名で行い、後の調査は記名で行ったが、そのことによる影響はないと思われる。

結果の整理 結果はKJ法(川喜田, 1967)によって整理した。そのために、各回答を筆者が40文字以内に要約した。かなりの分量を書いた学生も多く、短く要約することが困難な場合もあったが、その際には一番の強調点と思われる点をまとめた。そのため、ひとつの要約文(以下、カードと呼ぶ)が1人の意見に相当する。意味不明の文章のものが若干あったため、それらは除外した。そうして得られたカードを、占い・超能力および文系学生・理系学生ごとに、KJ法でカテゴリー化を行った。

なお今回のKJ法は、紙と鉛筆を使って行ったのではなく、KJ法の実施をパソコンで可能にしたソフトウェア「ISOP Ver.2.0」(株式会社アイテック)を用い、筆者が1人で行った。このソフトを使うと、カードを概観することにやや不自由さはあるものの、カード合わせの際に実際に紙を束ねたりする煩雑さがなく、また結果の図示をある程度自動的にやってくれるので便利である。

〈結果と考察〉

それぞれの結果をまとめ図にしたものを、図1から図4に示す。KJ法はボトムアップ的にカテゴリーを形成していく方法であるから、階層的に大きなカテゴリーの中に小さなカテゴリーが内包されるという形で結果が図示されている。今回は占い・超能力それぞれごとに理系学生と文系学生の比較をすることになるが、両学生の結果では、似たようなカテゴリーが出現した部分があった。そのためそのようなカテゴリーの名称は、両者で同じになるように調節した。

占いの捉えられ方の特徴

占いについての結果を図1図2に示す。理系学生・文系学生とも、大きなカテゴリー（以下、大カテゴリーと呼び「J」で表す）として「占いを肯定的に捉えている」と「占いを否定的に捉えている」がある。理系学生には「占いが当たるかどうか半信半疑」という肯定でも否定でもないカテゴリーがあるが、そこに含まれているカードは5枚と少ない。それぞれの大きなカテゴリーに含まれているカードの割合は、理系学生は文系学生よりも「占いを肯定的に捉えている」割合が5ポイントほど高く、約半分の49.2%となっている。文系学生は全員が女性であるが、「占いを肯定的に捉えている」のは44.5%に留まっている。

「占いを肯定的に捉えている」ことの中身を比較すると、両者とも「占いはそれなりのものである」「占いをうまく利用する」というカテゴリー（以下、中カテゴリーと呼び「J」で表す）が含まれており、共通する要素が多い。ただし理系学生ではその他に「占いを何となく受け入れている」というカテゴリーがあるのに対して、文系学生は「占いを積極的に受け入れる」というカテゴリーがあり、両者の違いの特徴が表れている。

「占いはそれなりのものである」は文系理系に共通する中カテゴリーであったが、そのさらに下位のカテゴリー（以下、小カテゴリーと呼び“”で表す）には若干の差異が認められる。“占いにはそれなりの根拠がある”と“占いには本物もある”という小カテゴリーは共通しているものの、そこに含まれるカードは文系学生の方がやや多い。また理系学生には“占いは統計学である”“タロット占いは当たる”という小カテゴリーがあるのに対して、文系学生にはそれはなく、代わりに“根拠が何か分からなくても占いを信じる”“占いには当たるものと当たらないものがある”がある。また「占いはそれなりのものであ

る」に含まれるカードは、文系学生の方が9ポイントほど多い。

「占いをうまく利用する」という中カテゴリーの中身は、やはり理系文系で差異がある。小カテゴリーの違いもあるが、注目されるのは、理系学生の方がこの中カテゴリーに含まれるカードが多いということであり、文系学生の10.9%に対して、理系学生は23.3%となっている。上述の「占いはそれなりのものである」という中カテゴリーとは、カードの割合が逆転している。

「占いを否定的に捉えている」という大カテゴリーの中身にも、やはり文系理系で差異が認められる。先述のように、文系学生の方がこのカテゴリーに含まれるカードの割合が高いが、量的に多いというだけでなく、中身も理系学生より質的に充実しているように見える。中カテゴリーとして、「占いは当たったという感じを与えるもの」「占いは信用に足りるようなものではない」「占いは重要ではない」というのは共通しているが、理系学生はそれ以外はない。文系学生はその他に「占いには悪い影響もある」「占いに根拠があれば信じるが」というものがある。

「占いは当たったという感じを与えるもの」という中カテゴリーの中身も、共通する意味合いの小カテゴリーがあるものの、“占いが当たるかどうかは気の持ちよう”という小カテゴリーは文系学生にだけ認められる。そういう意見の文系学生は、占いをするにしてもかなり割り切って考えているのであろう。

「占いは信用に足りるようなものではない」という中カテゴリーの中身は、意味的に共通する部分が多いが、“占いは当たったことがないから信用できない”という小カテゴリーは文系学生にだけ認められる。“人間を数種類に分けてしまうこと自体が無理”という小カテゴリーは両方にあり、そのような否定の仕方は論理的だと言えるだろうが、“当たったことがないから信用できない”というのは経験的あるいは直感的な否定の仕方である。それもまた、文系学生の特徴のひとつと考えられる。

「占いは重要ではない」の中カテゴリーの中身は両方で類似しているが、文系学生が“占いはあくまでお遊び”としているところを、理系学生は“占いは気休め程度のもの”としている。占いは重要なものではないことには違いはないが、遊びとして捉えられるかどうかの違いが、そこに反映しているのではないかと思える。

全体を外観しなおしてみると、「占いをうまく利用する」のはむしろ理系学生の方だが、文系学生の方が概して占いをクールに受けとめている姿が浮かん

占いを肯定的に捉えている。(49.2%)

占いはそれなりのものである。(15.0%)

占いはそれなりの根拠がある。

記元前から続いているような占術などには信憑性がある。一種の科学ではないか。

歴史の中でこれほど続いている、すべてがインチキだと否定することはできない。

占いはそれなりの根拠を持ってきているのだから、認めてもいいと思う。

占いは本物もある。

未来は分からないから占いに頼ってしまう。やはり科学だけでは無理がある。

大部分はインチキであって、ごく少数は本物だと思う。

風水など信じやすい要素直前の部屋の配置などは、言われるとおり実行してきた。

ほとんどデータメダが本当に正確に確率に乗っている人もいるかもしれない。

占いは統計学である。

今までのデータをもとに考えているから、ある程度は真であると言える。

中国の風水などは統計学的にもかなりの確率で当たるものだと思う。それは認めたくはない。

統計的に資料を集めれば当たる確率は上がる。だから超能力的というよりは数学的。

過去の前方というデータを元にしてるから、天気予報のようなものだと感じる。

過去のデータと現在の状態を照らし合わせる。当たったとしても偶然的なもの。

タロット占いは当たる。

タロット占いの経験では、相手のことを知ってほしいほど当たる。あるいは程度信じられる。

タロット占いはやる、なぜか分からないが心がよく当たる。それが人を引きつける。

タロット占いはあまりよく知らないけど、自分の過去・現在・未来が分かるらしい。

占いをうまく利用する。(23.3%)

都合のいいように占いを利用する。

結果の悪いことは信じない。手を見ただけで人相が分かるセキリ。

良いところだけ目に留めよう。客観的に自分も見つめられる。

自分にとって気分がいいものだから、いいことは信じて、悪いことは信じない。

自分の都合のいいように解釈すれば問題ない。でも3風座というのはいやと気になる。

悪いことが書かれていれば信じ、悪いことが書かれていなければ信じる。あまり適用してはいない。

他人の目線、自分の都合は都合のいいように捉える。

占いを信じてない。占いを信じている人、多くは、自分をよく見つけている。

占いが当たるかどうかよく分からない。自分なりに利用するだけ。

占いは日常の心の支えになる。

人は未来に対する漠然とした不安と希望があり、そのために占いに預かれるもの。

運気がいいと気分がいい。当然だけでなく、そういうことで安らぎをもつことができる。

将来のことは分からないので不安があり、自分のいいように解釈して安らげる。

気持ちは支えにはなると思う。

未来の世界である未来に対する不安を和らげるようなもの。

占いの結果は、現実から離れないところで防衛的かつうらみに捉えるのがよい。

一人の人生相談。当たらずが外れようが、決まっている人にはひとつの指針になっている。

運命が分かるものではなく、水の筒間を生きるための確かけの調味料のようなもの。

占いはあまり信じないが、少しは頼る。

あまり信じていない。しかし結果が出る。と頼りすぎてしまうもの。

占いを信じてないけど、占いを頼りし、困ったときは神頼みになる。とは、

何も信じていない。占いは、人間の願望や夢を象徴したもので、実際の確率は関係ない。

占いは信じないけど、占いを頼りし、困ったときは神頼みになる。とは、

信じるか信じないかは人それぞれだが、占いは人に勇気かいたいなものを与えてくれる。

占いを何となく受け入れている。(10.8%)

なぜか占いが気になる。

向の根拠があるのか、あまり信じていない。全く信じていない訳ではないが自分で不思議。

あまり信じているわけではないが、運命の占いをめぐる。何かいいことは信じる。

信じてないが気になるわけではない。ただ少々うさんくさい。

占いの結果を出す根拠はないと思う。でも目にするとうわすんどくしてしまう。

自分では信じていないつもりでも、なぜその気にさせられてしまうもの。

偶然としていて信じていないが、自分のことを言われると信じてしまうところはある。

あまり信じていないが、いつも占いを見てしまう。信じているかどうかと不思議に思う。

信じるか信じないかともある。精神的に信じているとは、信じている気がある。

基本的には信じていない。占いは人それぞれだが、占いは人に勇気かいたいものを与えてくれる。

占いを何となく信じる。

占いで良い運勢と言われれば自分いいが、頼りすぎるとどうかと思う。

占いは面白い。「今日の運勢」を後から見ると、けっこう当たっているところが多い。

占いを信じて、当たる。信じてないと思いが、みんな何となく占って見ているから。

図1 占いがどう捉えられているかについてのマップ (理系学生)

占いを否定的に捉えている。(46.7%)

その気になるから現実になる。(15.8%)

占いは、こうなって欲しいという願いが込められたもの、自分では信じていない。

占いは、未来を見るものではなく、未来をその方向へ導いていこうとさせるもの。

占いを信じる人には、かなりの確率で当たった行動をするから。

そうなるかと思っているか本当はそうなる。ポジティブな思い込みが占いを支えている。

再われたことが起こるように働いてしまったために、占いが当たるのだと思う。

占いは信じない。占いをやる人は、相手の心理を読みとれる能力を持っている人。

占いは、個々人が勝手ルールを作り、過程と結果を確信すること、その証明は不可能。

占いはすべて嘘である。書いてあることが巧妙で、当てはまると感じることが出来るもの。

結論いい加減。悪い占いは占いを信じ切るから悪いことにある。

占いは、個々人が勝手ルールを作り、過程と結果を確信すること、その証明は不可能。

未来のことを意味に言われれば、いろいろ解釈出来る。占いはその者のもの。

誰にでも起こるようなことを確信しに言っていてそれを自分の経験と結びつけるもの。

何か些細なことでも占いの結果に合わせようとしているために、占いが当たるか考える。

占いが当たるかどうかは確率の問題

当たるか当たらないかは確率の問題であり、100%は当たらない。遊びならいいが本まるとは違います。

占いは確率の要素が含まれていて、天気予報と似ている。

占いは信用に足りるようなものではない。(18.3%)

人間を数種類に分けてしまうか自体が無理

手相・星相・血脈型などで人の運勢が分かるのはおもしろい。一人一人違うはず。

血脈型や星相などで集団化し、その各々の運勢を見ることが出来るというところは非常に的。

占いは、人間を数種類のパターンに分けてしまおうの難い。

例えば血脈型占いが万能としたら4種類の性格がなくなる。だから信じてない。

占いは信じてない。血脈型などで何十億の人間を数単位に区別することは不可能。

12の星相だけで運勢が決まってしまうのだろうか。人間は12種類にしか分類されない。

自分は全く信じていない。同じ運勢すべての人がそうなるのはおかしい。

星相や血脈型で占うのはおかしな。数億で人間は分類ではない。

占いはインチキである。

占いは人間を精神的部分を構えたただの群衆的行為であると思う。

占いは信じてない。もし占いが正確なら、いろいろな占いの結果が大きく違わないはず。

経験からいって当たったことがないから、占いは信じてない。

友達や占いに誘われて占いをやるとか名刺を渡して運勢が分かると思えない。

インチキだと思ってる。でもいい結果が出たら、それを信じてないから。

占いはインチキだと思ってる。カードなどで人に未来が分かるのだろうか。

全く信じてないし、気にもかけない。気にもかけない。気体以外の何ものでもない。

占いはインチキ。自分の心の持ち方ひとつで変わる。

占いを9回続けても同じ答えは出ないから、いい加減なものだと思ってる。

なぜ占いなど信じられるのか。

占いを信じてしまったら、怖くても外も歩けない。無理だとしても特に問題はない。

占いという不確かなものを信じている人が多いのかと思う。

占いは信じてない。

占いは信じてない。占いはあまり信じてない。占いはあまり信じてない。占いはあまり信じてない。

占いは信じてない。占いはあまり信じてない。占いはあまり信じてない。占いはあまり信じてない。

占いは信じてない。占いはあまり信じてない。占いはあまり信じてない。占いはあまり信じてない。

占いは信じてない。占いはあまり信じてない。占いはあまり信じてない。占いはあまり信じてない。

占いは重要ではない。(12.5%)

占いは大切なものではない。

占いは超能力の一種だと思ってる。ただそれだけ。

実際のところ占いははたがたりないもの。信じている人も信じてない人もいていい。

生きていく時間を一生懸命生きることを考えるのがいい。占いは全く信じてない。

見たり聞いたりしてもすぐ忘れる。心の拠り所にはなりそうにもない。

当たったり外れたり半々なので、別にどうでもいい。あまり気にしてない。

人の人生を予測することなどは不可能。しかも信じようが信じまいが人の勝手である。

今まであまりどうこう考えていなかった。自分についていこうか考えておけばいい。

自分にとってあるものじゃないかという存在にすぎない。

占いで何もかも決まるとは思わない。いい結果も悪い結果も受ける。

占いはあくまで遊び。

占いは見聞きしても信じてすぎることなく、心の中にどめておくのがいい。

占いはただの嘘。その人の勝手だが、こだわりの強さは良くないのかもしれない。

人の不安を取り除いたカードゲームをやる。その人が満足すればそれでよい。

信じてなくなるが、真に未来のことは分からないから、自分のことを信じた方がいい。

占いはゲームの一種だと思ってる。それを実生活に持ち込むのはあまり好ましくない。

占いが当たるのかどうか半信半疑(4.2%)

もし占いが当たるものなら、今後の日本について的確な助言を待たしてほしい。

占いはあまり信じてないが、伊藤博文らの死を予言したのもあり、よく分からない。

基本的には信用するに足りない。しかし可能性はあると思うし、半信半疑にされるならいい。

本当なのかよく分からない。一心にどめどめとお願いしたい。

半信半疑。性格面はほとんど当たっているが未来のことは外れる。

古いを否定的に捉えている。(55.5%)

古いは当たったという感じを与えるもの。(22.6%)

古いのが当たるとは偶然だもの

当たるかもしれないが偶然の偶然だと思ふ。当たるとは偶然だと思ふ。

テレビの古いは嬉しい。でもたまに偶然だの古いは嬉しい。偶然という感じ。

一瞬古い喜びはなくても、それは単なる偶然だし昔いふやうがない。

古いのが当たるとは偶然だと思ふ。

当たる時と当たらない時があるから、たまたま偶然だと思ふ。

自分の気持ち次第で、自分は基本的に当たらないと思つていて、偶然が重なっただけ。

古いは当たらないと思つて、当たったとしても偶然だしかな。

古いのが当たるとは偶然だと思ふ。

古いを感じる気持ちと古いを感心したことと古いの気持ち次第だと思ふ。

自分の性格と気持ちの開離。落ち込んだりしていても、落ち込んでいても一喜一憂する。

古いを感じる気持ちと古いを感心したことと古いの気持ち次第だと思ふ。

自分の性格と気持ちの開離。落ち込んだりしていても、落ち込んでいても一喜一憂する。

気分次第。向かいのきつかりが解けたらいいと思つている。

古いに当たるとは偶然だと思ふ。

当たるとは偶然だと思ふ。

古いに当たるとは偶然だと思ふ。

自分も気持ちの開離であり、当たるとは偶然だと思ふ。

当たったと感じるカラクリある

よく当たる古いは、前報をうまく含む。心算的にやるシステムだと思ふ。

半分当たって半分当たらないもの。気分なものだと思ふ。

たまたま古いで書いてきたことが自分にあるだけ。当たったと思つていうだけ。

その気になるから現実になる。

なぜ当たるのかでなくて、思つておこなう。その人の偶然だと思ふ。

信じているから、そういふことが起こる。その人の偶然だと思ふ。

信じていたことを重視して、その通りにしようとする。偶然だと思ふ。

いいことは輪呑みにして、悪いことは吐き出してしまふのであると思ふ。

信じているから、そういふことが起こる。その人の偶然だと思ふ。

信じていたことを重視して、その通りにしようとする。偶然だと思ふ。

信じておこなう。その人の偶然だと思ふ。

信じているから、そういふことが起こる。その人の偶然だと思ふ。

信じていたことを重視して、その通りにしようとする。偶然だと思ふ。

信じておこなう。その人の偶然だと思ふ。

信じているから、そういふことが起こる。その人の偶然だと思ふ。

信じていたことを重視して、その通りにしようとする。偶然だと思ふ。

古いには悪影響もある(6.6%)

悪いことは覚えておいて、いいことは忘れる。悪影響があると思ふ。

よく分らないが古いを見てびっくり。みんな当たらない。昔の中大業になった。

人を信じたりするので、信じず人は裏切者だと思ふ。

古いをよく見るが、当たるとは偶然だと思ふ。

古いをよく見るが、当たるとは偶然だと思ふ。

人の心を動かすもの。偶然は信じたくない。

あまりのめり込むと人生まで狂うから、偶然に当たるとは偶然だと思ふ。

影射されてしまふからなるべく信じないように。見聞しないようにしている。

半分信じてるが、悪い結果が出ることも多いから、あまり古いは読まない。

悪い古いは、必ずと寄つていいは当たらない。

古いは信用に足りないものではない。(16.1%)

古いは当たったことがないから信用できない。

古いに当たらないもの。偶然だと思ふ。当たらないことがある。

当たったことがないと思ふ。自分自身が当たったことがないので、古いは当たらないものだと思ふ。

当たらない場合が多い。古いの書いていることはアララキに書いていない。

人間を数種類に分けてしまうこと自体が無理

とても偶然があるが、偶然だと思ふ。偶然だと思ふ。

絶対に信じない。同じ種類の人は何人もいて、偶然は偶然だと思ふ。

同じ意味・血縁関係などで人間をすべてを測ることはできないと思ふ。古いは信じない。

古い内容を感じたいという人間の心理を信じているもので、当たらないと思ふ。

古いに当たらない。同じ種類の人ばかり出てくるから、当たらないと思ふ。

血縁や血縁関係などで人間をすべてを測ることはできないと思ふ。古いは信じない。

古いに当たらない。同じ種類の人ばかり出てくるから、当たらないと思ふ。

古いに当たらない。同じ種類の人ばかり出てくるから、当たらないと思ふ。

血縁や血縁関係などで人間をすべてを測ることはできないと思ふ。古いは信じない。

古いに当たらない。同じ種類の人ばかり出てくるから、当たらないと思ふ。

古いに当たらない。同じ種類の人ばかり出てくるから、当たらないと思ふ。

血縁や血縁関係などで人間をすべてを測ることはできないと思ふ。古いは信じない。

古いは信用に足らず馬鹿馬鹿しい。

古いに当たらない。同じ人間が人のことを古うの人は大それたことと思ふ。

信じている人にとっては当たるとは偶然だと思ふ。左右されるのは馬鹿らしい。

絶対に当たらないと思ふ。勝手に人の運勢を決めないでほしい。

古いに当たらない。自分勝手な行動は自分で決めることができる。

古いに当たらない。自分勝手な行動は自分で決めることができる。

古いに当たらない。自分勝手な行動は自分で決めることができる。

古いに当たらない。自分勝手な行動は自分で決めることができる。

古いに当たらない。自分勝手な行動は自分で決めることができる。

古いに当たらない。自分勝手な行動は自分で決めることができる。

古いに当たらない。自分勝手な行動は自分で決めることができる。

古いは重要ではない。(8.8%)

古いは大したものではない。

自分は死なないし古いでもない。でも信じている人がいるなら、それはそれでいい。古いは当たらないと思ふ。

少しは当たると思ふが物信じているわけではない。

古いはその場にいる人の年齢の少く、別にどうでもいい。

古いは大したものではない。

信じている人にとっては当たるとは偶然だと思ふ。左右されるのは馬鹿らしい。

少しは当たると思ふが物信じているわけではない。

よく分からない。「古う当たるとは偶然だと思ふ。」

古いは大したものではない。

信じている人にとっては当たるとは偶然だと思ふ。左右されるのは馬鹿らしい。

少しは当たると思ふが物信じているわけではない。

よく分からない。「古う当たるとは偶然だと思ふ。」

古いは大したものではない。

信じている人にとっては当たるとは偶然だと思ふ。左右されるのは馬鹿らしい。

少しは当たると思ふが物信じているわけではない。

よく分からない。「古う当たるとは偶然だと思ふ。」

古いは大したものではない。

信じている人にとっては当たるとは偶然だと思ふ。左右されるのは馬鹿らしい。

少しは当たると思ふが物信じているわけではない。

よく分からない。「古う当たるとは偶然だと思ふ。」

古いは気休め程度のもの

何となく信じているが、気休め程度のもの。大して気にしていない。

古いに当たらない。別にいいと思ふ。

古いに根拠があれば信じるが(1.5%)

いろいろな雑誌を読んだら、当たるとは偶然だと思ふ。

古いに当たらない。別にいいと思ふ。

古いに当たらない。別にいいと思ふ。

古いに当たらない。別にいいと思ふ。

古いに当たらない。別にいいと思ふ。

でくる。占いを肯定的に捉えるにしても否定的に捉えるにしても、総じて文系学生は、占いは楽しむものという割り切りができて見えるのに対して、理系学生は、占いに根拠があると考える人はそれを真剣に受けとめるが、そう考えない人は拒否してしまうという傾向がある。

超能力の捉えられ方の特徴

超能力についての結果を図3図4に示す。大カテゴリーとしては両者ともに、『超能力はあるだろう』『超能力はないだろう』『超能力があるかどうか判断できない』の3つが形成された。また、文系学生にだけは、割合は小さいながらも、『超能力にはあまり関心がない』という大カテゴリーもある。それがあっても文系学生の特徴であろうが、より顕著な特徴は、共通する3つのカテゴリーに含まれるカードの割合の相違である。

まず『超能力はあるだろう』という肯定論は、文系学生の51.9%に対して理系学生はやや多く64.8%となっている。『超能力はないだろう』という否定論は、文系学生の方がかなり多く、理系学生が16.4%であるのに対して、文系学生は34.4%となっている。『超能力があるかどうか判断できない』という大カテゴリーは、理系学生の方が割合が高く、文系学生の11.5%に対して18.9%に上っている。総じて見ると、理系学生の方が超能力を否定しがたいものと捉えており、逆に言えば文系学生の方が冷めて見ている傾向がある。

『超能力はあるだろう』という大カテゴリーの中身を比較してみる。両方とも、「超能力はあるだろうと思う」「超能力はあるのではないか」「超能力は人間に備わった能力」という中カテゴリーがある。「超能力はあるだろうと思う」の中カテゴリーは、文系学生が24.4%であるのに対して理系学生は32.0%と割合が高く、また内容も充実しているのが窺える。とくに“超能力は実際にあると確信している”“将来には超能力は解明されるだろう”といった小カテゴリーは理系学生にだけ認められるもので、超能力をかなり確信して受け入れている人がいることを反映している。文系学生は、むしろ「超能力はあるのではないか」という中カテゴリーが理系学生よりも充実しており、“超能力があってほしい”“超能力が自分にあつたらいいのに”といった小カテゴリーがあることから分かるように、超能力の根拠が云々といったことよりも、直感的にそういうものがあるといいなと考えている様子が見られる。理系学生は「超能力は人間に備わった能力」という中カテゴリーに特徴が表れていると思われる。そこ

の部分だけはまだ一段階下位の категорияがあり、「超能力は人間の潜在能力」と「超能力は特別なものではない」という2次的な中categoryがある。そのうちの前者の方が、とくに理系学生に特徴的であると思われ、そこには“超能力は、かつての人間は持っていたが多くの人が失ってしまった”“動物にある力だから、人間にもあるのではないか”“脳の使っていない部分に超能力が潜んでいる”という小categoryがある。それらは、超能力の根拠を何とかして何かに見いだそうとしているかのようであり、これは文系学生にはあまり見られない特徴である。

『超能力はないだろう』の大categoryの中身は、両者でどう違うであろうか。先述のとおりこのcategoryは、文系学生の方がかなり割合が高くなっている。しかも文系学生の方は、そこに7つの小category（中categoryはない）が形成されており、理系学生以上に文系学生は、超能力の否定についての意見を豊富に有しているという感じである。文系学生の結果に見られる“超能力があれば、もっと有効に使われているはず”“超能力は単なる本人の思い込み”という小categoryは理系学生には見られないものであり、文系学生の方が冷静に超能力を見つめているということも窺える

『超能力があるかどうか判断できない』というcategoryには、超能力を否定しきれない人の意見が含まれている。この部分は理系学生の方が割合も高く内容も充実している。また“科学ですべて分かるわけではない”“超能力が絶対には言い切れない”とった理系学生にだけ認められる小categoryが、理系学生の超能力に対する捉え方の一面を特徴づけている。

調査Ⅱの結果の要点

総合的考察に入る前に、調査Ⅱの結果のポイントを簡潔にまとめておくことにする。

- ①占いでも超能力でも、肯定的に捉えている人が多いのは理系学生の方であり、とくに超能力を否定する理系学生はかなり少ない。
- ②占いを否定的に捉える文系学生は過半数であり、理系学生よりも占いをクールに受けとめる傾向がある。
- ③超能力を肯定的に捉える理系学生は6割を越え、何らかの“科学的”な根拠を見いだそうとする傾向がある。

超能力はないだろう。(16.4%)

超能力はトリックがあったりこじつけだったり (4.9%)

超能力とは、ありふれた自然現象を用いて、芸術的に魅了すること

超能力はない。偶然やこじつけに過ぎない。

超能力には疑問があり、必ずタネがあるように見える。

手先の超用な人がトリックや道具を駆使して見せているだけだと思う。

超能力は絶対に信じない。それらは論理的でなく、一種のひらきに過ぎない。

基本的に信じない。何かトリックがあるだろうと考える。

超能力などあるわけはない。(4.9%)

テレビなどを見るとすごいと思うが、実際はこじつけやトリックでできていると思う。

超能力はないと思う。超能力を持つ人がいるなら、なぜ誰も信じていないのか。

超能力とは、人間の心理が生んだ虚構の自分と考ええる。

空中浮遊などは信じられない。なぜあんなものができることができるのか理解できない。

超能力は絶対にないと思う。あるなら、物理的に証明されてもおかしくない時代だから。

常識から考えれば、超能力はないと考える。再現実証する。

超能力はないだろうと思う。(5.7%)

超能力はないと考える。世にも信憑性に欠ける。

基本的に超能力を信じない。実際に見たことがないから。

この目で見たことがないから信じない。そもそも胡散臭い。

超能力はあり得ない。自分の信憑性の低さを反省し信じられない。

基本的に信じられない。目の前で自分が体験できる確率やってもらわないと信じない。

生まれつきの才能も超能力を見ることがないから、信じない。

超能力は存在しないと思う。なぜなら実際に見たことがないから。

科学で証明されていないのだから、あったとしても、自分が体験できなかったらイヤだ。

超能力があるかどうか判断できない。(18.9%)

科学ですべて分かるわけではない。(1.6%)

現代の科学が完璧だとは思えない。しかしこの世は科学がすべてではないと思う。

現代の科学が完璧だとは思えないが、すでに科学がすすんでいるものは数多くある。

超能力は非科学的であるのだから、科学の世に存在しないと思う。

あるかどうか判断できない。(2.5%)

インチキな超能力者があまりに多いので判断できない。

超能力はないと言いきり切れないが、「ある」と言うのも証拠がある。

あるかどうか分からない。テレビなどではちゃんと見せてほしい。

否定はできないが、信じたくない。(1.6%)

効力は真実に近いかもしれないが、超能力を人々が絶対的に信じてしまっているのではどうか。

超能力をあまり信じたくない。証明に利用される場合が多い。

半信半疑で判断がつかない。(6.6%)

やはり自分の目で見て確かめては、その存在は分からないと思う。

超能力についての体験はないが、それだからと勝手に否定する気は全くない。

現在の科学では、完全に肯定も否定もできないので、何とも思えない。

超能力に対しては科学的に超能力を論議したが、超能力を否定することはできない。

“ある”と信じたくなかったり、絶対ないと感じたりする。

半信半疑。体験したことがなく信じられないが、テレビを見るようにも思える。

超能力は実際にあるかどうか分からない。

半信半疑。ただの手法を超能力だと習われると、非常に腹が立つ。

超能力が絶対ないとは言いきれない。(6.6%)

超能力の種類による。テレビなどなら存在する可能性はあるのかもしれない。

超能力は絶対にないとは言いきれない。人間にはまだ未知の部分がある。

未知の力があつてもないかもしれない。

全額を肯定はしないが、あつても不思議ではないと思う。

実際に見たことはない。でもあつてもおかしくない。

超能力など絶対に存在しないと言っている人もいるが、絶対とは言えないのではない。

動物や植物などの類は信じないが、人間の持つ可能性は大きいと思う。

超能力はないだろう。(34.4%)

テレビ番組の超能力は嘘(7.6%)

あまり信じられない。テレビの超能力は、昔はすごいと思ったが、下らないので見ない。	信じない。テレビなどやっていてのを見るだけ、ウソっぽくて腹が立つ。	超能力関係の番組は何かウソっぽいので、信じていない。
あつらいいけど、実際にはないと思う。ユリダラも斬、マリウもウソさんささい。	あまり信じていない。ユリで見てると、「やらせ」という感じがする。	あるわけがない。テレビの超能力は、たぶんのマジックにしかならない。
超能力はないと思う。テレビでやっているのは、明らかにやらせだと思うから。	本当にあるわけではないと思う。テレビでよくやっているけど、ウソのような気がする。	テレビなどは絶対仕事まわっていると思う。日常生活で何かしている人がいない。
	テレビでやっている超能力を見ていては、つまらない気がする。	

超能力はタネのある手品(5.3%)

生で見なくて信じてないと思う。数々何をやっているか分からないから。	超能力は信じてない。きつと何かは隠れているに違いない。	テレビでやっているが、あまり信じないし何かタネがありそうに思う。
超能力は手品に似たような物だと思う。手品には必ずタネがある。	絶対ない。科学的にも裏証されてないし、超能力者は必ず何かトリックを使っている。	超能力者はみんなやるのが同じで、トリックが決まっているように見える。
	トリックがありそうだから、超能力はないと思う。	

超能力があれば、もっと有効に使われているはず。(3.1%)

超能力者がいる割には、何の役にも立っていないから、本気で探していないと思う。	超能力はないと思う。もしあれば、世の中はもっと豊かになっていると思う。
超能力はないと思う。あればその能力によって一産業興行ははず。	本当にあれば、それを自分のいいように使う人が出てくるはずだから、何とも思えない。

超能力は単なる本人の思い込み(2.3%)

ないとは思えないけど、ほとんどが自分の思い込みからきている。

あるかどうか分からないけど、何となく思い込みが強い何かの運いだと思う。

単に本人の思い込みで、その人がただ超能力だと言っただけだと思う。

自分で体験したことがないから超能力はないと思う。(4.6%)

自分は経験したことがないし、経験したという人が、そういうことはあるはずない。	興味がよくなく分からないが、実際に確かめたことがないので、信じていない。
超能力はないと思う。昔スプーン曲げを盗んでみたが、曲がらなかった。	スプーン曲げが思い浮かぶが、自分は体験してできないので、超能力はないと思う。
日常においてであったことがないから、ないと思う。	自分ができないから、超能力はないと思う。

超能力には根拠がない。(7.6%)

全く信じられない。超能力を持つ人がいるなら、事件や災害は簡単に分かるはず。	嘘っぽくかなと思う。信じられる根拠がない。	ないと思う。この世の中にそんな不思議なものがあるとは思っていない。
科学的に考えて、念力などで何をせよに何かが可能にするなんてありえない。	関心や興味もなく、全く信じてない。	超能力はないと思う。最新の浮遊写真なんかは、絶対にインチキだと思える。
そんなことができるのは、映画の中の夢芝居にすぎない。人間の夢なので。	人間にはそんな力はないと考えるから、超能力はないと思う。	ない、信じられない。絶対ない。
	ないと思う。バカバカしい。	

根拠は示せないが、超能力はないと思う。(3.8%)

超能力は確かにすごいものかもしれないけど私は信じてない。	信じてみなければ信じられない。実際に確かめても、トリックを盗んでみただろう。
その場で信じてるが、後で改めて考えると嘘だと疑う。	超能力はちょっと信じられない気がする。
	根拠はないが、超能力はないと思う。

超能力があるかどうか判断できない。(11.5%)

半信半疑で判断がつかない。(6.9%)

よく分からない。テレビで見ているときはすごいと思うが、その後の超能力は信じない。	本当はあるのかもしれないけど、テレビで行っているのはイカサマだと思える。	よく分からない。信じてしまうものもあるけど信じられないものもある。
テレビなどで見るのと違って、半信半疑。信じても信じてないの真ん中くらい。テレビで見たら「オー」って思う。	超能力はあると思うが、可能性は分からない。	本当にそんなことが出来るのか、いつも半信半疑。
不思議なものだと思うが、マジックのような感じもする。		あると思うが分からない。

超能力にはあまり関心がない。(2.3%)

超能力には興味なし。(1.5%)

本当にそのような力を持っている人もいないと思うが、自分では信じないと思わない。	興味がないから、どうとも思わない。
	特に信じて信じてないという事はない。きつ見ていて信じているのから見てしまう。

超能力を自分で見聞すれば信じるかもしれないが。(4.6%)

自分が実際に体験するまでは信じられない。	目の前でやれば多少信じるかもしれないが、今まで見たことない。	あると思うけど、信じ切れない。目の当たりにしたら、絶対にあると思ってしまう。
	ないと思う。見たことないから分からないが、もし実際に見たら少し信じてしまうかも。	目の前でやってもわからない限り、私は信じるのができない。
		目の前で見たことがないので、信じられない。

「占いは女性がするもの」という一般的にあるイメージは、どうやら占いを実際にやるかどうかの行動レベルから来ているものであり、占いの根拠が云々ということになれば、むしろ男性ないしは理系の学生の方が、それについて考えることが多いようである。女性ないしは文系の学生は、占いや超能力をあまり深く考えず気楽に受けとめて、それを割り切って楽しんでいるようにも見える。単に「信じる」「信じない」ということでは見えなかった情報が、このあたりに見いだせそうである。

総合的考察

何らかの俗信を信じるときには、典型的にはどうやら2つの思考の仕方があるらしいことが、今回の調査結果から見いだせる(図5)。

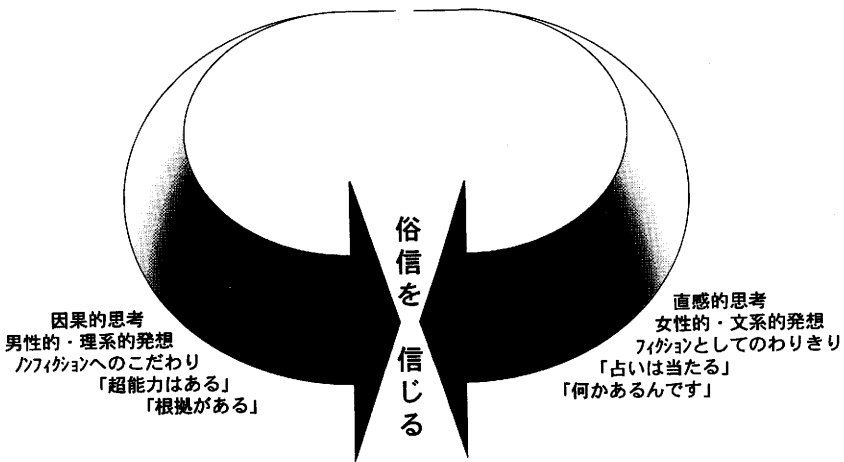


図5 「俗信を信じる」ことへの2つの思考

そのひとつが、物事の因果を考えて、何らかの根拠を見いだして、それで「超能力はある」などと考えるものである。その根拠は、広く一般に妥当であると思われるものでは必ずしもなく、科学的に一見見えながら、実は“科学”で認められているものではない。これは、どちらかといえば男子学生あるいは理系学生にありがちな思考である。科学的な思考のちょっと行き過ぎた思考のようでもあり、この思考で俗信があると考えると、本当に実在するものと

して捉える傾向がある。ノンフィクションへのこだわりがあり、現実の話として捉えられる。

もうひとつが、直観的に考えて「占いは当たる」などと考えるものである。その根拠については考えたこともないということが多く、根拠を問われても「何かあるんです」といった答えが返ってくるだけで、根拠が何であるかは大して問題にされない。これは、どちらかといえば女子学生あるいは文系学生にありがちな思考である。物事の仕組みや因果を探索することはあまりなく、しかしそれゆえに俗信をクールに割り切って捉えている。フィクションとしてわりきっているところがあり、本物と偽物あるいは現実と非現実の境界は曖昧にされている。

この2つタイプの思考は、科学的な検証を経ていない俗信、すなわち万人がそれと認めるわけではない事柄を、いずれにしても受け入れることにつながる。それらの思考は上述のように対照的なのだが、行き着く先は同じ「俗信を信じる」ということである(図5)。

ただしこの2つの「俗信を信じる」ということは、同じ「信じる」でも、やはり質的な違いがあると言える(図6)。一方は、日常の時空間の中に、ノンフィクションとして俗信があると信じることである。もちろんそこで対象になっている俗信についての確信があるとは限らないが、日常の時空間の中そのものに“信じる”自分がいるということであり、“信じない”自分はない。それに対してもう一方は、日常の時空間の中に俗信という特別な時空間があり、その枠の中だけでフィクションとしての俗信を信じることである。その枠内では、自分自身が中心となった“信じる”自分がある。しかし、時間や空間が変われば、そういった俗信を忘れていたり、クールに見られるようになったりする。具体的には、たとえば雑誌の占いを見ているときはけっこう真剣に読んだりし

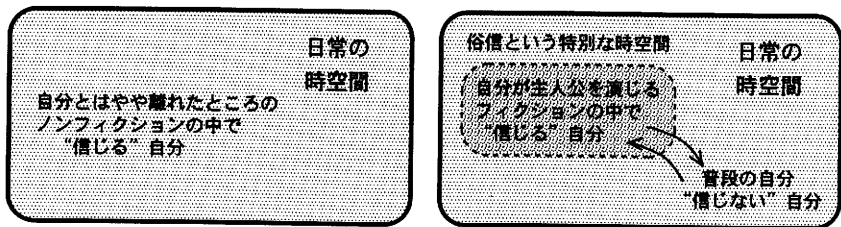


図6 「俗信を信じる」ことの2つの在り方

て一喜一憂もするが、やがて何が書いてあったのかさえ忘れてしまったりすることである。

これら「俗信を信じる」ことの2つの在り方は、先述の男性的・理系的発想と女性的・文系的発想と対応している。前者の方が、俗信の傾倒した場合には根拠のないことを真剣に信じるということにもつながり、危うい一面がある。それに対して後者は、遊び心があり、ある意味でいい加減である分、俗信に深入りしすぎることはないのかもしれない。筆者はかつて、失恋をしたときに恋愛運が良くなるという真珠を通信販売で購入した女子学生について報告したことがある（伊藤、1995）。その女子学生は、真珠に祈ったりしていたのだが、半信半疑のところもあり、非常にしたたかに上手くそれを利用して恋愛時のつらさを乗り切っていった。それなどは、ここで提示した女性的・文系的発想の信じるということの典型である。また本論の冒頭に挙げた「女子大生の日記」が、このタイプの信じるを、見事に表現している。それに対して、オウム真理教に入信していった多くの理系出身信者の信じるやり方は、男性的・理系的発想の信じるのひとつの典型例であろう。もちろん女性であっても、占いに本当にのめり込んでいってしまったりすることもあるように、男性的・理系的発想で信じることもあるし、男性の場合にその逆もありうるだろう。

上述の2つの思考、すなわち因果的思考と直感的思考に共通しているのは、黒か白かいずれかをはっきりさせようとする決定論的な思考であるということである。そこに欠けているのは、どちらがよりもっともらしいか、あるいはどちらがより妥当かといったことを考える確率論的な思考であり、それが欠けている時には、安易に「俗信を信じる」ということが生じやすいと考えられる（Gilovich, 1991）。我々の日常の人間関係などでは、確率論的思考がむしろ求められることが多いのであるが、決定論的思考に偏りがちである根底には、現在の教育の在り方の問題などがあり、根が深いと思われる。

ここに試論として提示したモデルの試論は、十分なものでは必ずしもないから、さらにデータに照らし合わせて検証していく必要があるだろう。また、俗信を信じる程度や質的違いの個人差は、何によっているのか、またその発達の形成はどのようになっているのか、教育の問題も絡むそうといった点についての心理学的検討はまだ十分になされてはいない。筆者にとっても、目前の取り組むべき課題と考えている。

引用文献

- Gilovich, T. 1991 How We Know What Isn't So. -The Fallibility of Human Reason in Everyday Life. The Free Press. (守一雄・守秀子訳 1993 人間の信じやすきもの -迷信・誤信はどうして生まれるか- 新曜社)
- 伊藤哲司 1995「俗信を信じる」ということ 茨城大学人文学部紀要(人文科学論集), 28, 25-56.
- 伊藤哲司・下山田芳子・徳富五月・佐藤治子・野口哲也・人見健太郎 1996 いわゆる“非科学”への人々の傾倒に関する社会心理学的研究 文部省科学研究費補助金奨励研究(A)研究報告書
- 伊藤哲司 1996 “非科学”に傾倒する若者たち -占いを経験した若者への面接調査- 日本社会心理学会第37回大会発表論文集, 90-91.
- 川喜田二郎 1967 発想法 中央公論社
- 野村昭 1989 俗信の社会心理学 勁草書房

付 記

伊藤(1995)・伊藤ら(1996)・伊藤(1996)のリプリント入手を希望される方は、tetsuji@mito.ipc.ibaraki.ac.jp までご請求下さい。